

29:15 ラバーンはヤコブに言った。「あなたが私の親類だからといって、ただで私に仕えることもないだろう。どういう報酬が欲しいのか、言ってもらいたい。」

29:16 ラバーンには二人の娘がいた。姉の名はレア、妹の名はラケルであった。

29:17 レアは目が弱々しかったが、ラケルは姿も美しく、顔立ちも美しかった。

29:18 ヤコブはラケルを愛していた。それで、「私はあなたの下の娘ラケルのために、七年間あなたにお仕えします」と言った。

29:19 ラバーンは、「娘を他人にやるよりは、あなたにやるほうがよい。私のところにとどまっているさい」と言った。

29:20 ヤコブはラケルのために七年間仕えた。ヤコブは彼女を愛していたので、それもほんの数日のように思われた。

29:21 ヤコブはラバーンに言った。「私の妻を下さい。約束の日々が満ちたですから。彼女のところに入りたいのです。」

29:22 そこでラバーンは、その土地の人たちをみな集めて祝宴を催した。

29:23 夕方になって、ラバーンは娘のレアをヤコブのところに連れて行ったので、ヤコブは彼女のところに入った。

29:24 ラバーンはまた、娘のレアに、自分の女奴隸ジルパを彼女の女奴隸として与えた。

29:25 朝になって、見ると、それはレアであった。それで彼はラバーンに言った。「あなたは私に何ということをしたのですか。私はラケルのために、あなたに仕えたのではありませんか。なぜ、私をだましたのですか。」

29:26 ラバーンは答えた。「われわれのところ

では、上の娘より先に下の娘を嫁がせるようなことはしないのだ。

29:27 この婚礼の一週間を終えなさい。そうすれば、あの娘もあなたにあげよう。その代わり、あなたはもう七年間、私に仕えなければならない。」

29:28 そこで、ヤコブはそのようにした。すなわち、その婚礼の一週間を終えた。それでラバーンは、その娘ラケルを彼に妻として与えた。

29:29 ラバーンは娘のラケルに、自分の女奴隸ビルハを彼女の女奴隸として与えた。

29:30 ヤコブはこうして、ラケルのところにも入った。ヤコブは、レアよりもラケルを愛していた。それで、もう七年間ラバーンに仕えた。

レアは目が弱々しかったとありますが、この弱々しいにあたるヘブル語「ラコート」には「柔軟」「やさしい」という意味もあります。これはヤコブの好みの問題だったのでしょう。彼の好き嫌いがはっきりしていたことがわかります。

好みの女性のために7年間も忍耐して働いたというのは、ある意味すばらしいのですが、彼の「欲しいものを手に入れたい」という性格からすると、きよめられなければならない点があったわけです。

ヤコブはラバーンの都合で彼にだまされたのですが、それはまさに以前自分がやったことです。ラバーンが悪いのか、ヤコブが悪いのか。またはこの家系はそのようなだましあいの家系なのか、などと人は考えますが、神様の視点で見るならどれも意味のない議論です。

神様はヤコブを自分の罪に気付かせ、取り扱って、きよい成長した者に変えたいのです。そして人類を救い祝福するという神の大いなるご計画を、ヤコブを通して成就なさろうとしているのです。

ヤコブはそのことを少しばかり感じたのかもしれません。ラバーンと争うことをせずに、もう7年間仕えました。

人と争い自分を正当化することは簡単です。しかし、それは不毛であり、ときにはサタンに用いられます。神の視点で見る必要があります。遠回りの中で神様はそこでしか得られない恵を与えてください。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

